



新国立劇場公演チラシ



藝大奏楽堂公演チラシ



『藝大オペラ』第59回 定期公演&新国立劇場オペラパレス特別公演 D・チマローザ作曲《秘密の結婚》

1

右上：10月5日奏楽堂公演「第1幕」
右下：10月6日奏楽堂公演「第1幕」
左上：11月3日新国立劇場公演「第2幕」
左下：11月4日新国立劇場公演「第2幕」

Photo by TAKE-O

TOPICS OF
MUSIC

2013.08-2014.01

音旬

1

『藝大オペラ』 第59回定期公演&新国立劇場 オペラパレス特別公演 D・チマローザ作曲《秘密の結婚》

一九五六年にG・ヴェルディ作曲の『椿姫』で第一回公演をスタートした『藝大オペラ定期公演』は、今期五十九回目を迎えた。今回は、十月五日、六日に開催した通常の定期公演（奏楽堂）に加え、文化庁支援の「平成二十五年大学を活用した文化芸術推進事業」オペラにおけるアートマネジメント人材育成事業」を受け、新国立劇場の協力の下、十一月三日・四日にオペラパレスにおける特別公演が実現した。さらに、三菱地所（株）との共催による恒例の『藝大アーツイン 東京丸の内2013』で同演目のハイライト公演を行い、『藝大オペラ』が異なる会場で多くのオペラファンを魅了した一年となった。

2

藝大アーツ・スペシャル2013 「障がいとアーツ」

「聞こえる色、見える音」

十一月三十日、十二月一日の二日間、本学奏楽堂にて藝大アーツ・スペシャル2013が開催された。



3

ジュネーヴ音楽大学との交流演奏会

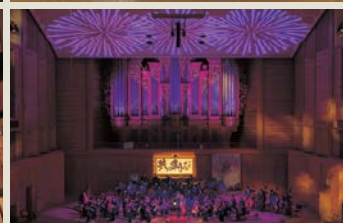
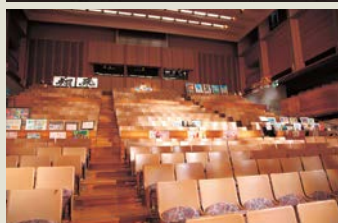
上より

ジュネーヴ音大との合同演奏 奏楽堂にて

4つのヴァイオリンのための協奏曲

両校の学生たち

ジュネーブ公演終了後



藝大アーツ・スペシャル 2013

「障がいとアーツ ～聞こえる色、見える音～」

2

上：聴覚障がい者を中心に多くの人たちが

オーケストラの中に入って音楽を楽しんだ

中右：指揮者の葉 聡さんと子供たち

中左：能の謡

右下：音と色で表現された《美しき青きドナウ》

左下：美術作品を奏楽堂の客席に展示

3

ジュネーヴ音楽大学との交流演奏会

今年は、視覚障がいをもつ世界的なヴァイオリニスト川島成道氏とミャンマーの伝統楽器のプロの演奏家と、国内の視覚・聴覚・知的障がいをもつ幼児から大人までの方々の作品の展示と演奏、ワークショップ（能の心・ダークライト・ペインティング・Tシャツ作り）、関係者によるシンポジウムが行われた。今回は会場として奏楽堂全体を使ったことが大きな特徴で、客席にまで絵画や立体作品が展示され、ホワイエと舞台の両方でアジアと西洋の多様な音楽が演奏された。最後のコンサートでは、この日作ったTシャツを着て満面の笑みを浮かべた子供らによるファッション・ショーが舞台で行われ、聴覚障がいをもつ子供らがオーケストラの楽器の間に座って音楽を楽しみ、ホール全体が一体感に包まれて二日間の演目が閉じられた。

ジュネーヴ音楽大学は一八三五年創立の州立高等音楽教育機関。創立当初にはフランツ・リストも教えていた名門で、現在も数多くの世界的な演奏家が教授陣に名を連ねている。十月三日、選抜された本学の弦楽・管楽の学生十五名と教職員六名がジュネーヴを訪れ、合同オーケストラを組織、オーケストラおよび室内楽を両学の教授陣とともに演奏。藝大教授陣によるマスタークラスも行われた。十月二十一日からは、ジュネーヴ側の学生・教授陣が来日、ミハエラ・マルティン、今井信子教授らによるマスタークラスが行われ、大阪のいずみホール、本学奏楽堂、ヤマハホールで交流演奏を行い、友好を深めるとともに大きな成果を披露した。



いま、映像でしゃべること？ -Orality in the Moving Image-

メディア映像専攻

1

OPEN SYMPOSIUM 2013

アニメーション専攻

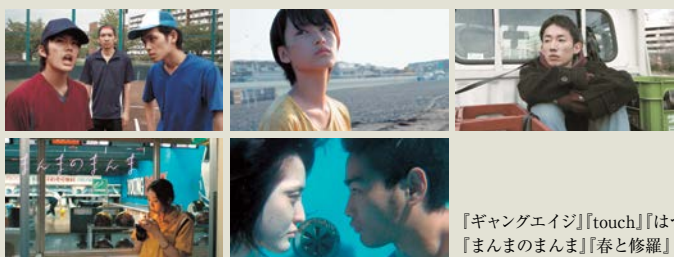
2



オープンシアター 2013 Vol.2

映画専攻

3



『ギャングエイジ』『touch』『はつ恋』
『まんまのまんま』『春と修羅』

TOPICS OF FILM AND NEW MEDIA

2013.08-2014.01

映 旬

1

いま、映像でしゃべること？ -Orality in the Moving Image-

◎メディア映像専攻

大学院映像研究科では、サムスン電子ジャパン株式会社の協力のもとに、携帯電話、スマートフォン、デジカメなどの小型化、多機能、高性能の時代の映像を考えるGALAXY Lab.を二〇一三年四月に立ち上げた。

そのGALAXY Lab.で行ってきた様々な実験とそこから生じた映像文化への問いかけを、十二月七日、八日に渋谷ヒカリエ8/COURTにて、トークイベントやショート・プレゼンテーションと展示上映を通して公開した。

2

OPEN SYMPOSIUM 2013

◎アニメーション専攻

「アニメーション映画祭の現在形」というキーワードを元に国際アニメーション映画祭に

3

オープンシアター2013 Vol.2

◎映画専攻

十二月十四日、横浜校地馬車道校舎三階大視聴覚室において、八期生長編制作実習作品『はつ恋』、九期生夏期制作実習作品『touch』『ギャングエイジ』『春と修羅』『まんまのまんま』の上映会を行った。ゲストに三宅隆太氏(脚本家、映画監督、スク립トドクター)を招いたトークショーも実施した。

4

オープンシアター2013 野上上映会

◎映画専攻

十月五日、横浜校地新港校舎において、『ビューティフル・ニュー・ベイエリア・プロジェクト』

ついで、様々な立場の複数の視点から議論するシンポジウムを、伊藤有孝教授による企画・進行により開催した。

パネリストには、スイスのフェスティバル・プログラマー、映像作家オットー・アルダー氏、アルゼンチンのアニメーション作家ワン・パブロ・ザラメーラ氏、イスラエルの漫画家ニシム・ヘズキヤ氏、韓国のフェスティバル・ディレクターキム・ソンジュ氏、山村浩二教授の五名を迎えて行われた。



7

公開講座『DEFA映画の歴史と名作』

映画専攻



5

コンテンポラリーアニメーション入門

アニメーション専攻



『スプリング・プレイカーズ』

4

オープンシアター 2013 野外上映会

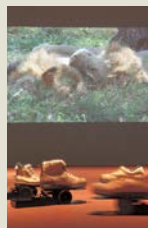
映画専攻



8

日中韓アニメーション学生国際共同制作プロジェクト

アニメーション専攻



(写真：木奥恵三)

6

ライオンシューズ

メディア映像専攻

ライオンシューズ
◎メディア映像専攻
21 DESIGN SIGHT 企画展 藤原大
デイレクション「カラーハンティング展 色
からはじめるデザイン」で展示された「ライオ
ンシューズ」。展覧会デイレクターの藤原大が
アフリカで採取したライオンの色をもとにカ
ンペールと藤原大が靴をデザイン、桐山孝司

6

◎アニメーション専攻
馬車道エッジズ コンテンポラリーア
ニメーション入門第十四回『How I make
animated film』は、スイスからドローイング・
アニメーションで現代を代表するジョルジュ・
シュヴィツゲベル監督を迎え、作品上映と自
身による具体的な制作プロセスを解き明かし
た。第十五回『現代日本のインディペンデ
ント事情』では、インディペンデント・アニメ
ーションの定義から、作品の傾向、発表の方法等、
昨今の状況をテーマに山村浩二教授と、しり
あがり寿、和田淳、湯浅政明の三名の監督に
よりシンポジウムが行われた。

5

コンテンポラリー アニメーション入門

◎アニメーション専攻

クト(映画専攻第7期修了制作)と『スプリン
グ・プレイカーズ』の上映会を行った。当初は
野外上映を予定していたが、当日、天候不良の
ため、急遽新港校舎内Aスタジオに会場を移し
て実施した。

7

公開講座 『DEFA映画の歴史と名作』

◎映画専攻

十月十九日、横浜校地馬車道校舎三階大視聴
覚室において、旧東ドイツの国営映画スタジオ
DEFA(ドイツ映画株式会社)に関する公開
講座を実施した。ベルリンの壁崩壊と同時に公
開された名作『カミング・アウト』(一九九〇年
ベルリン映画祭銀熊賞受賞)を上映し、東ドイ
ツ映画研究の第一人者であるラルフ・シエンク
博士(映画研究家・DEFA財団理事長)、山
根恵子(法政大学国際文化学部教授)、筒井武
文(大学院映像研究科教授)の三名による討論
を行った。

8

日中韓アニメーション学生 国際共同制作プロジェクト

◎アニメーション専攻

今年で四年目となるアニメーション専攻の学
生国際共同制作。東京藝術大学、韓国芸術総合
学校、中国伝媒大学の各大学より、大学院生を
中心にアニメーションを学ぶ学生を選出して六
チーム作り、十二月の韓国・ソウルにて十日間
の滞在期間の中で、今年のテーマである「縁
(Connection)」を元に、チーム毎に短編アニ
メーションの共同制作を行った。



上：「藝大生へ卒業修了作品インタビュー」
とびラー（アート・コミュニケーター）が藝大へ訪問。
アトリエで卒業・修了する学生にインタビューを行なった。
インタビュー記事は、東京藝術大学卒業修了作品展のHPに掲載されている。

下：「見学会（対話による鑑賞会）」
東京藝術大学卒業修了作品展の会場にて、
とびラーがファシリテーターとなり、来館者と一緒に対話による鑑賞を行なった。



右：「とびらステーション」
年に数回、100名を超えるとびラーが全員集合する総会。
8月とはとびらプロジェクトの藝大代表教員である日比野克彦教授と共に、
今後の活動を考えた。

左：「障がいのある方のための特別鑑賞会」
障がいのある方のための、美術館の休室日を利用した特別鑑賞会。
とびラーは会場の運営や鑑賞をサポートしている。

TOPICS OF
FINE ARTS

2013.08 - 2014.01

美旬



右上：「とびらボードでGO!」

東京都美術館の特別展で子供たちに磁気ボードを貸出し、お絵描きをしてもらうプログラム。
とびラーのアイデアにより、磁気ボードに描かれた絵はポストカードのぬりえにしてプレゼントした。

左上：「あなたも真珠の耳飾りの少女プロジェクト」

とびラーのアイデアで生まれたプロジェクト。
美術館来館者の方が、フェルメールの作品になりきって写真撮影を楽しんだ。

下：「紙芝居プロジェクト」

開催中の展覧会を題材に、ストーリーも絵もすべてとびラーオリジナルの紙芝居を上演している。

1

とびらプロジェクト

（東京都美術館×
東京藝術大学アート・コミュニティ形成事業）

東京藝術大学と東京都美術館が連携し、アートを介したコミュニティの形成を目指すプロジェクトが平成二十四年よりスタートした。広く一般から募集した百名を超えるアート・コミュニティ（愛称…とびラー）が、人と作品・人と人・人と場所をつなぐ役割を担い、東京都美術館を拠点に活動中である。とびラーの活動はボランティアだが、学芸員や大学教員のサポートではない。新しい暮らしの形、アート・コミュニティをつくりあげるプレーヤーとして活躍する人々である。世代や職種を超えて集まったとびラーが生み出す様々な活動によって、多くの人々のアートを介した体験がより深く、充実したものとなることを目指している。

<http://tobira-project.info/>



「夏休みの美術館」

上野・谷中界隈の商店や工場を訪ね歩いて廃材を集め、それらを素材として創作するワークショップを実施した。



「スペシャル・マンデー・コース(学校向けプログラム)」

展覧会の休室日を学校団体のために特別に開き、ゆったりとした環境で対話による鑑賞プログラムを行っている。



「Museum Start あいうえので活躍する“とびラー”」

本事業は「とびらプロジェクト」と連動しており、とびラー（アート・コミュニケーター）が様々な場面で子供たちの伴走役を務める。



「ビビハドトカダブック」

ビビハドトカダブックは、上野の9つの文化施設をつなぐ“合言葉”。上野公園のミュージアムにもっと行きたくなる日比野克彦教授オリジナルデザインの冒険アイテムを参加者全員に配付している。



「のびのびゆったりワークショップ」

障がいのある子もない子も共に参加し、多様な価値観を認め合い、大人と子供が共に学び合うプログラム。



「放課後の美術館」

週1回、美術館を子供たちの放課後の居場所に。連携施設へのフィールドワークや廃材を用いたフリーワークなどを行う。現在、「上野公園を舞台にした〇〇をつくる」をテーマに制作が進む。



第8回藝大アートプラザ大賞 3

2

Museum Start あいうえの (上野地区文化教育施設連携事業)

東京藝術大学と東京都美術館が推進役となり、上野動物園や東京国立博物館、国際子ども図書館を含めた九つの文化施設が共催連携し、上野公園に集まる文化施設の魅力を編み直すプロジェクトが平成二十五年からはじまった。「Museum Start あいうえの」は、子供も大人も対等に学び合える環境の整備を目指すラーニング・デザイン・プロジェクト。「とびらプロジェクト」と連動し、さまざまなプログラムを実施している。

<http://museum-start.jp/>

3

第8回藝大アートプラザ大賞

十一月二十七日から十二月十三日まで、藝大アートプラザにて「第八回 藝大アートプラザ大賞展」(作品テーマ「音(おと)」)を開催した。これは、学生の制作活動の成果を広く社会に発信するため二〇〇六年度から実施している学内アートコンペで、厳正な審査を経た入選作品を展示、販売するもの。八回目を迎えた今回は、

総勢四十七名(六十五点)の作品が会場の藝大アートプラザを飾った。

初日に行われた授賞式では、学長賞(藝大アートプラザ大賞)、準大賞、藝大BIO賞を受賞した六名が列席し、宮田亮平学長と三田村有純藝大アートプラザ所長から賞状と目録が手渡された。今回、学長賞(大賞)を受賞したのは大学院美術研究科修士課程絵画専攻(油画)に在籍する小林あずさんの作品「妙な綾なる」。

小林さんは、「今回大賞を受賞できたことを大変嬉しく思います。今までにいくつかの公募展などで入選する機会がありましたが、私にとって受賞は初めての体験となります。今回のアートプラザ大賞の募集テーマは『音』でした。作品では音楽を聴いている際の感覚世界を描いています。外界の存在である音が内界に流入する様、外部の存在である音が内部に水のように注ぎ込み、満ちていく姿を描いています。作品のタイトルの「妙な綾なる」には意味と音の面からダブルミーニングをしています。『妙な綾』は音楽の美しい調べの意味と、英語のeternalの音とをかけています。『綾なる』は美しく彩ること、yearner(英)「切望する人」をかけています。今回の大賞を励みに、今後も制作に励みたいと思います。また作品を介して皆様の目に触れる機会があれば幸いです。ありがとうございました」と話していた。